

# 読書論

Syrma

## はじめに

---

読書とは何か？

読書してどうなるのか？読書しないとどうなるの？

メリットはあるの？弊害は？

本選びの基準は？

そんなことを一生懸命に考えてみた本です。

ご自身の本に対する熱い思いを今一度思い返していただけたらなと思います。

推敲は行いましたが、誤字・脱字、お気に召さない表現等が残ってしまうことがあります。コメント等で一報頂ければすぐに修正しますので、よろしく願います。

2011 9月

## 世界が広がり、人生がおもしろくなる

---

人間は知っているものしか見ようとしません。いや、「知っているものしか見えない」と言った方が正確なのかもしれません。

例えば、街に象形文字で書かれた看板があったとします。

そんなもん誰も見ないと思われるでしょうが、古代の歴史に興味があったり、象形文字を研究したりしている人だったら、「おや？」と立ち止まって読み始めるでしょう。

このことは養老孟司さんが『養老孟司の〈逆さメガネ〉』(PHP新書)の中で、現実には「行動に影響を与えるもの」として説明がされています。

これを言い換えると、

行動に影響を与えるものを増やせば、現実の量が増える

と言えないでしょうか。

要は知っていることを増やせば、いろんなことが目に入ってくるということです。

例を挙げてみます。

学校で万有引力を習いました。

それまでは、ものが落ちることなんて当たり前すぎて意識にもものぼりませんでした。しかし、引力の存在を知ると、ものが落下するのを見て「地球がものを引っ張っているなんてすごいな」と感動することができます。

最近話題になっているクラウドを知ったとしましょう。その瞬間から、CM、iPhoneのアプリ、ニュースなどなどさまざまなところに登場する「クラウド」というワードが目に入るようになるでしょう。

このように「知る」ことは、世界を深く、広くします。

知っていることが多い人の方が広い世界で生きているのです。

世界を広げ続ければ、蛙が井戸で泳ぐのか、海で泳ぐのかほどの違いになるでしょう。

本を読み、知っていることを増やすことは、まず他でもない自分の人生をよりおもしろくするのです。

## 洗練された人付き合いができる

---

本を読んでいる人は良く、

「少し話をすると、本を読んでいるか読んでいないかはすぐに分かる」

と言います。

この書籍を読んでいる人はおそらく本が好きな方でしょう。紙媒体だけでは飽き足らず、電子書籍まで読んでいるわけですから。

ですから、この主張は良く分かって下さるのではないのでしょうか。

本を読んでいる人の話題は毎回同じような気がします。

異性の話、芸能人の噂の話、職場の愚痴、ブランドの話などが話の中心です。

そこから、何か教訓や法則などを導いてくれるならまだ聞きがいもありますが、そういう知的な「オチ」はなく終わってしまいます。

それだけでなく、外界にはあまり興味がないからか、こちらの話はしっかり聞いてくれません。

例えば相手が異性の話をしているときなどに、男女の脳の性質の話をして、上の空で「そういう固い話はやめようよ」とでも言いたげな表情になります。

この手のいわば「次元」が違っていると、その人とは交流がなくなってくるでしょう。

そうして、次第次第に高尚な付き合いができるようになってくるはずですが、これを洗練された人付き合いと言います。

しかし、それは孤独をも意味します。

周りに友達がなくなってくることでしょう。これはみなさんなら経験されているかもしれませんね。

そこで、昔から「本の中の住人を友達にせよ」と言ってきたのでしょう。

しかし、高尚な話をしたいからと言って、友達を切るのも芸がないと言えそうかもしれません。ですから、こちらは学ぶ者として相手から生きるヒントやさまざまな法則を導きたいものです。そうしてやり方を工夫しつつ、「上手く」付き合うというのも本から学ぶことができない大切な生きる知恵だと思います。

## 人生の充実 独自の道

---

人生は一度きり。

これは生まれてこのかた何度となく聞かされてきました。

しかし、今一度良く考えてみると、実に儂い。

この儂い人生、自分だけの道をいきたいと人間なら誰しも願うはずです。

読書をすればその願いに、少しでも近づけると思います。

生きていくということは、選択肢の中から一つを選び抜くことだと換言できます。

この選択肢が多いほうが、悩みも多くはなりますが、好きな道を選べることになります。

選択肢を多くするには、やはり知識が必要です。

知っているものは考えることができますが、何もないところから全く新しいものを生み出すことは不可能だからです。

それには、やはり読書が良いでしょう。

まとめます。

人生の充実

→独自の道を歩むこと

→選択肢が多い方が良い

→そのためには知識が必要

→読書

私はこのようにして、[人生の充実]と[読書]が結びつくと考えています。

イメージとしては以下です。

本を読むと、いつからか自分の心の中に本の住人が住み着くようになります。

それまでは自分しか住んでいないところに、ルームシェアをするように（ハートシェア？）突如として他人が入ってくる。

松下幸之助の本を読めば、松下幸之助が。

福沢諭吉の本を読めば、福沢諭吉が。

土方歳三の本を読めば、土方歳三が。

このように、どんどんにぎやかになってきます。すると、何かをしようとするときにその「同居人」が

「こうやった方が良い」「いやいや、こうしなさい」「違う、これが良いんだ」

と議論し始めます。この議論一つ一つが選択肢となっていく。最後はオーナーである「自分」が決定を下せば良いというわけです。

ですから、どんな住居人と暮らすか、すなわちどんな本を読むかで、選択肢の質も変わってくるので、独自の道を歩みたいと願うなら、ブームの本などはなるべく読まないようにする必要があります。

## 読書の弊害

---

何事も良い面と悪い面の両面で構成されています。

ここでは、気をつけるべき読書の悪い面を考えたいと思います。

私はこの弊害は大きく分けて二つあると考えています。

一つは、前節でもお話ししましたが、高尚なことを考えるようになると自然と周囲を下に見てしまうというもの。もう一つは、行動力がなくなる恐れがあるというものです。

まず、前者の説明をします。「知ってるということ＝偉いこと」これはまだ常識として残っています。まだ残っていると表現したのは、最近ではこれが通用しない人もいるからです。先生を軽く見る現象に見られるように、知識の相対的な地位は低下しています。理由は定かではありませんが、インターネットや電子辞書、携帯電話など、手軽に知識を持ち運ぶことができ、勉強する必要がなくなったからでしょう。先生が勉強の方法を教えなくとも、ネットで検索すれば先生が知っている方法論の何倍もの情報が集まりますから、「先生恐れるに足りず」となってしまうのではないかと考えています。

しかし、本を読む人は知識に対して尊敬の念を抱いている方が多い気がします。私もそうです、知識は確かにネットで検索できるがそれらを有機的に結び付け、創造的な仕事をするためにはネット上ではなく脳の中に知識をためておく必要があると考えています。

ですから、知識そのものではなく、知識が豊富な人に対しても尊敬してしまう。気をつけるべきは、これは同時に「知識の少ない人を下に見る」ということにもなっている　　ということです。

気づかぬうちに、そういう横柄で傲慢な態度となってしまいます。これは我々が尊敬して止まない知識への冒瀆行為です。私も知らず知らずのうちに「何？カオス理論も知らないのか？」と小馬鹿にしたような態度をとってしまうことがあります。自分も研究者ほどに知っているわけではないということを高い棚に上げて、謙虚な気持ちを忘れてしまうのです。これには、自分でも情けないと思う限りであり、常に戒めなければならないことです。

では後者の「行動力がなくなる」ということはどういうことでしょうか。

議論倒れ、机上の空論、これらの言葉がこのことを端的に表してくれています。

本を読むことで様々な生きた情報が頭に詰め込まれている。それは、ものを作る材料がたくさんある状態と言えます。しかし、材料が多すぎて何を作ればよいか分からなくなってしまうという現象が起こります。

何か商品を買うとき、あまりにもものが多いと結局なにも買わずに終わってしまうことがあります。それが、それと同じことが言えるのです。

このことに関して、脳科学者の茂木健一郎さんは、

「脳の『感覚系の学習』と『運動系の学習』のバランスがとれていない」

『脳を活かす仕事術』(茂木健一郎 PHP研究所)

と表現しています。要旨はインプットが多い人はアウトプットもそれに見合うだけの量を意識的に行わなければ、いざ形にしようとしたときに上手くいかないということになります。

本を読んでインプットを増やすことも大切ですが、そういった知識というのは結局実践に移し、形にしなければ意味のないものになってしまいます。そして、その実践をしっかり満足したものとして行うためには、日頃から「運動系」の方も鍛えておかなくてはならないのです。

ところで、この実践に関して、学びの天才である福沢諭吉は

「読書は学問の手段である。学問は実践への方法である。」『学問のすすめ』(福沢諭吉 三笠書房)

と、実践の前提として読書を定義しています。

## 本を選ぶ

---

どんな本を読んでも良いのですが、基準を持っておくと本選びは楽しくなります。

参考までに私は以下のような基準を持っています。

- ・ 内容
- ・ デザイン
- ・ 直感
- ・ 二度見
- ・ 確認作業はやめる

一番目の内容ですが、これは内容に価格以上の価値があれば迷わず買うというものです。

新書などはだいたい同じ価格帯です。しかし、中身は千差万別、値段相応のものもあれば、そうでないものもあります。

中には、「長年の研究が実を結び、ここに完成！」という大作が700円などの破格で売られていることがあります。こういうものはすぐに読まずとも、買って置いて損はないでしょう。

二番目のデザインですが、本棚はいわばコレクションを並べる棚のようなものです。ガンダムのプラモデルやミニカーなどをコレクトする人がいるように、本を集めているようなものです。

ですから、カッコいいデザインの本があると「飾りたい・・・」とつい買ってしまふことがあります。

三番目の直感ですが、これは説明不要でしょう。

「直感によってパッと一目見て『これが一番いいだろう』と閃いた手のほぼ7割は、正しい選択をしている。」

これは羽生善治さんが『決断力』(角川書店)のなかで述べています。これを信じ買ってみると、な

るほどこれは日常生活にも応用できると思い、なんでもほぼ直感で決めてしまうことにしています。

四番目の二度見です。気になるものは意識せずとも、二回目を見てしまうものです。

一度手に取ったが、今日はやめておこうと思い、棚に戻す。くるっと一周して、またその本を手取る。

これが二度見です。この二度見をしたものは、もう逆らわずに諦めて買うことにしています。

五番目の、確認作業をやめるですが、これがなかなか難しい。ついつい、普段から考えていることを確認するために本を選んで買ってしまうものです。また出版側もそれを利用して、本の題名をつけてあるケースもあつたりします。

そうですね、例えば、「仕事のできる男はなぜ女性の扱いも上手いのか？」なんて本の題名があつたら、「そうそうそれはおれも考えていたんだよ」と思い、その確認作業のために本を買ってしまうというような事例です。これは優越感に浸るというメリットのほかになにもないので、やめた方が良く考えています。

あとは、長年に渡るベストセラーなどは普遍的な価値を持っているということで買ってみます。また、本の中で引用で使われている本があればそれも買ってみます。

みなさんは本選びにどのようなこだわりを持っていますか。

こだわってばかりいるのも硬くなってしまいましたが、好きなものかこだわらないとおもしろくありません。

## 終わりに

---

このたびは最後まで読んで下さりありがとうございます。

本は人生をおもしろくする最適なツールです。

これに優るものはないとさえ考えています。情報を得るという点でテレビやネットとは共通していますが、本には自分との対話という要素がプラスされます。

情報を元に自分に問いかけたり、その答えを出したりする過程で器量が深く育っていく。そんな印象を持っています。

これからも、お互いに「知の飽くなき探求者」として冒険を続けましょう。